

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	Kissane Lee Andrew
論文審査担当者	主 査	医療政策・管理学	宮 田 裕 章	
	精神神経科学	三 村 将	衛生学公衆衛生学	武 林 亨
	衛生学公衆衛生学	岡 村 智 教		
学力確認担当者：			審査委員長：三村 将	
			試問日：平成29年 2月16日	
(論文審査の要旨)				
論文題名：End-of-life preferences of the general public: Results from a Japanese national survey (終末期医療に対する一般国民の選好についての全国調査)				
<p>この調査の目的は、終末期ケアの場所と延命治療に関する一般市民の希望を、異なる終末期シナリオのもとで判断し、これらの考えを評価する新しい枠組みをつくることであった。がん、心不全、認知症および持続性低栄養状態の4つの終末期シナリオを用いし、2段階の地理的クラスタサンプリング法を用いて、日本国内で2000人の成人を対象に郵便調査を実施した。有効回答数は969件（回答率48.5%）であった。</p> <p>終末期ケアの場所の希望は病気によって異なり、終末期を自宅で過ごしたいと思う患者の割合は、がんが39%、心不全が22%、認知症と持続性低栄養状態で10-11%であった。延命治療に対する考えはシナリオと治療の種類によって異なり、がん、心不全および認知症では、抗生物質および点滴の服用を約2/3が希望したが、経鼻胃管栄養法、経皮的内視鏡下胃瘻造設術、人工換気、心肺蘇生法を希望した人は少なかった。ロジスティック回帰分析モデルではわずか3~9%のバリエーションを示したのみだが、がんや心不全の場合には延命治療を受けたいかどうかは病院で終末期を過ごしたいかどうかと関連があり、認知症の場合には延命治療と病院で終末期を過ごしたいかの関連はなかった。</p> <p>審査ではまず、調査票の作成においてどのような資料を基にしたのかという質問がなされた。第4回終末期に関する意識調査を出発点とし、Coppola (1999) のフレームワークを調査票デザインに適応したと説明された。次に、多変量解析における終末期ケアの優先度と、性別、年齢、教育歴、所得との関連に関する質問がいくつかなされた。男性が女性よりも病院における終末期ケアの優先度を表明する可能性が高かったのは日本のジェンダーの役割が異なるためではないかと考えられ、それ以外の要因として生存率に差がある可能性が述べられた。終末期ケアの希望と教育歴との関連については、本論文で示した多変量解析では、これと多重共線性の問題がある「所得」との間に有意な相関があったため、「教育歴」は分析から除外されたと説明された。最後に、周囲の人の死に関する経験頻度が年齢によって異なる影響はないかと問われ、本論文の多変量モデルでは、死の経験（「過去の5年以内の家族の死亡、友人の死亡」）が独立変数として扱われた時、終末期ケアに対する考え方との関連性はなく、一生涯における周囲の人の死に関する経験はモデルでは表現されず、年齢と相関する可能性が高いと説明がなされた。</p> <p>以上のように、本研究は検討すべき課題を残してはいるが、終末期ケアの場所と延命治療における一般市民の考え方を調査し、新しい評価の枠組みをつくる際に重要となりえる知見を提供した点において、有意義な研究であると評価された。</p>				